

むさしの TALK

父の介護を通して 人の温かさに触れました

岸本葉子さん

エッセイストの岸本葉子さんは、父親の介護を通じて、武蔵野市の良さを改めて実感したと言います。どんな出来事があったのでしょうか。



岸本葉子(きしもとようこ)

1961年神奈川県鎌倉市生まれ。東京大学教養学部教養学科卒業。会社勤務時から文筆活動をはじめ、その後退社して中国に留学。帰国後は多数のエッセイを発表している。近著は『続 ちょっと早めの老い支度』(オレンジページ)、『二人の親を見送って』(中央公論新社)など。

PRESENT

今回取材した、岸本葉子さんの直筆サイン本『二人の親を見送って』(中央公論新社)を抽選で5名様にプレゼント! 詳しくは本誌折り込みハガキをご覧ください。



1年半前に、父が90歳で亡くなりました。晩年は認知症が進み、武蔵野市で暮らす私のそばのマンションに引き取って、兄姉で面倒を見たのですが、父の晩年の5年間は、とても幸せだったのではないかと思っています。というのも、とても優しい近所の方々に恵まれたから。父と姉と一緒に散歩に出かけたときに、足が弱っている父は転んでしまったのですが、まだ開店前で店を閉めていたのに居酒屋の方が気付いてくださって、店の前に椅子を出し「ここで少し休んでいってください」と言ってくれました。父がひとりでお花屋さんで迷子になってしまったときには、お花屋さんが気付いて私の家に電話で知らせてくださった。多岐の方々に温かく接していただき、武蔵野市だからということでもないのかもしれないけれど、人がせかせかしていかなくて、心にゆとりがある方がとても多いように感じています。

また私の好きな場所に、境山野緑

地というところがあります。緑が多くてとても気持ちの良い場所なのですが、ここは地域住民の方々が公園の価値を認識されて「この緑を残したい」と声をあげたことよって守られ、住民の手によって緑地管理されている場所です。その一画に「武蔵野をこよなく愛した●●」とインシャルが入った小さなベンチがあります。故人の方が寄贈したものだと思のですが、ほかの方々が憩い、休む場所を遺されたという行為をとても素敵だと思いました。皆さんの地元愛や優しい人となり積み重なって、住みやすく居心地の良い武蔵野市をかたちづくっているように思います。このままいつまでも変わらないうでいてほしいですね。

